



学舎秋色空間

撮影：渡辺広治

松涛

No.22

2006. 2. 3

主な記事

学部長挨拶
同窓会長挨拶
今年度の活動計画
農学部を去るにあたって
支部だより
特集・震災復興
職場紹介 ——正蒲鉾——
農学部フォーラム
ベンリレー 同窓生からのたより
学部だより
編集後記

16 14 12 11 10 8 6 4 3 3 2

農学部の最近の状況

農学部長 鈴木 敦士



ています。被災地の要望に如何に答えるかは、農学部の今後の存在価値を左右するかも知れませんので、一層の努力をはかるつもりです。

テレビ公開講座の実施

けました。このことが、一般教員の研究費の一部カットによつてもたらされたと考れば、必ずしも歓迎すべきことは言えない面があります。

国立大学の法人化後、約一年半が経過しました。本年七月には、新潟大学としての「十六年度の業務の実績に係わる評価」が国立大学協会大学評価委員会によって行なわれました。これは、予め文部科学省に提出してある中期計画の中の十六年度計画の達成状況を評価するものです。

七・一三水害及び中越大地震被災地における活動

昨年七月十三日に発生した大水害及び十月二十三日に発生した中越地震への対応も大きな仕事の一つとなりました。被災地へのボランティア活動と被害実体の調査、被災地の復興への貢献が大きな課題となっています。新潟大学

は、進行状況は「計画通り進行している」と言う評価を受けました。財務内容については「特筆すべき進行状況にある」という最高の評価を受けました。

JABEE認定コース

生産環境科学科の「地域環境工学」と「森林管理科学」の二つのコースがJABEEにより技術者教育プログラムとして認定されました。平成十七年三月の卒業生を皮切りに、認定有効期間に、これら

度に外部評価機構から「研究評価」を受けた際に、交流協定締結とのネットワーク構築の重要性を指摘され、懸案となっていたものです。

参加者は延べ三百人（外国人からの招待者十九名）にわたり、成功裡に終えることが出来ました。シンポジウム開催にあたり、同窓会から御寄付いたいた基金の一部を使用されました。シンポジウム開催のコースを修了した学生は技術士資格の一次試験が免除され、技術士補の国家称号が得られます。現在、このJABEE認定コースを更に増やすかどうかの議論が進んでいます。

国際シンポジウムの開催

本学部が学術交流協定を結んでいる東アジアの五つの大学（インドネシアのボゴール大学、中国の東北農業大学、韓国の嶺南大学生物資源大

学、モンゴルのモンゴル農業大学、タイのチエンマイ大学）

が一同に会した国際シンポジウム「東アジアの食料生産と環境保全」が本年九月十四、十五の両日に本学で開催されました。このシンポジウムにおいて特別な予算（インセンティブに基づく予算）を獲得することができました。

開催は、農学部が平成十四年

度に外部評価機構から「研究評価」を受けた際に、交流協定締結とのネットワーク構築の重要性を指摘され、懸案

度に外部評価機構から「研究評価」を受けた際に、交流協定締結とのネットワーク構築の重要性を指摘され、懸案

度に外部評価機構から「研究評価」を受けた際に、交流協定締結とのネットワーク構築の重要性を指摘され、懸案

農学部を去るにあたつて



農学部を去るにあたり思つこと

伊東睦泰《農業生產科學科

一九六八年夏、新潟大学農
学部に新設された畜産学科草

満足をしているところです。

争原理が持ち込まれて自らの成果の追求に追われ、時には本来の存在意義、そして大学の機能を支える教員・職員・学生の自発的役割が忘れ去られているようにみえます。政治情勢、社会情勢の反映であることは明白ですが、とはいっても歴史の流れは常に復元力

農学部を去るにあたつて

尾和尚人(應用生物化学科)

平成十二年六月、農水省の試験場から農学部に赴任し

た。十八年ぶりの大学であり当初は戸惑もあつたが、久しふりに研究ができる場を得て心弾む思いで教員生活を始めたことが思いだされる。

前任者からは盛り沢山の研究課題を引き継ぎ、オーバー

ドクターを含めて数人の大学院生が研究を継続していた。

「トマトの有機栽培の解析」については、三十年来「ばか

し肥料」を自家製造してトマトとキュウリの栽培農家のお

世話になつて数年来調査され
てきたが、思わぬトラブルが

生じて2年後には試験を断念した。しかし、早朝五時起き

農学部がさらなる発展に向かうよう切望します。

国府川右岸地区の現場に学生を引き連れて調査に通つた。そんな中で、旧知の理化学機器屋さん的好意で、地表から五メートルまでの下層土を非搅乱で採取できた。下層土はアルカリ性であつたが、還元型硫黄化合物を多量に含み、風乾するとたちまちにして強酸性になつた。肝心の硫黄酸化細菌は五メートルの下層土にも高密度で生息していて、これまでとは異なる種であることがDNA分析で明らかになつた。

六年間という短い期間であり、赴任当初の思いは叶わないこともあつたが、応用生物化科学科をはじめ多くの素晴らしい人々と出会うことができ、充実した教員生活を送ることができました。

合物の酸化により生成した硫酸による酸性障害であつた。

来調査され、**硫酸化細菌**の研究は、ここで農業現場と結びつく。

試験を断念
朝五時起き
とになった。佐渡農業改良普及センターの支援を受けて、





退職にあたつて

山本仁志（生産環境科学科）

昭和39年から平成18年まで約40余年間お世話をになりました。多くの先生方、卒業生と教室の学生諸君に支えられて、今日まで来られたことに感謝の念で一杯です。

新潟大学農学部学生、卒業生の絆が、新潟地震の救援活動を機に膨らみ、各学科に出稽会、緑友会、六環会、工和会、翔牧会が発足しました。五十嵐移転と新潟大学農学部同窓会35周年の記念事業で諸先輩の大好きな力添えがあり、農学部同窓会の基盤が固められました。

最近、卒業生から「研究室のOBとして、教室の歴史も……」とのことから五十嵐移転前の事ですが、昭和48年1月26日早朝に、造林教室より出火、隣の病理教室、階下の砂防教室、運材教室、応用昆虫教室の五号館が被災しました。「教室が燃えている、これから窓を壊して卒論を取り出していく」との学生からの知らせ、現場に駆けつけた

ときには、校舎は焼けこげた太い柱を残した無惨な姿でした。

また、ある時は、研究室が集中豪雨に遭遇しました。教室に出向くと、机の上や床にはびしよびしよの新聞紙の山、天井からボタボタと外は天気なのに雨が降っている。遅くの頃未を話してくれました。

ある先輩が「研究資料は長く手元に置かず、出来たところからまとめて、発表しておけば、そうすれば何處かに残つていい」とよく言われました。水に濡れたぐらいなら、復元できましたが、焼失したものは、長時間と手数のかかる再調査・再実験を必要とします。

火事だけは、一生遭いたくなものです。

スズメバチが研究室の窓際の木に、昨年から巣を創りました。昨年は小さいうちに大風で吹き飛んでしまいました。今年は空き家になつてい

ますが、昨年より少し大きめの巣が木にぶら下がっています。昔からハチの巣のある家

は火事に成らないといいま

す。

私の農場着任は、三八豪雪を超える大雪となつた昭和六十年の三月で、果樹園のブドウやナシの木は無残にも八つ裂き状態でした。初仕事が復旧のための予算要求でした。が、幸いにその秋に新植できました。しかし、二十年を経た現在、人手が無い事から廃園に追い込まれ、既にその果樹はない。二十年の在職中に技術職員の採用は一人としてなく、減員に加えて高齢化による活力の低下が心配されま

す。

二十年前的新大農場の職員数は、佐賀大や琉球大と共に全国の国立大学の中で最下位グレードでした。そうした条件下で、行(二)技官の不補充が予想されたので、早急な行(一)化を目指し立てる「苦情申し立て」と言う大胆な行動に技官を巻き込みました。幸い他大学に先駆け

て全員行(二)化の成果を得ました。また、週休二日制導入が、宿泊直問題を抱えるど

の大学農場でも大きな難題となりました。新潟大学では話し合いを尽くして難問を克服したことは誇れます。着任当時の村松農場は序舎の周りですらカヤと雜草で覆われ、草叢の中に適当に駐車する有様でした。当時を知る人は今の環境に驚いています。

年間約千五百人の子供たちが訪れ、動物と環境に親しんで行き、また、年に何組かの同窓会の帰りに立ち寄り、それぞれの思いを巡らせながら

ます。

二十年前的新大農場の職員数は、佐賀大や琉球大と共に全国の国立大学の中で最下位グレードでした。そうした条件下で、行(二)技官の不補充が予想されたので、早急な行(一)化を目指し立てる「苦情申し立て」と言う大胆な行動に技官を巻き込みました。幸い他大学に先駆け

て全員行(二)化の成果を得ました。また、週休二日制導入が、宿泊直問題を抱えるど

の大学農場でも大きな難題となりました。新潟大学では話し合いを尽くして難問を克服したことは誇れます。着任当時の村松農場は序舎の周りですらカヤと雜草で覆われ、草叢の中に適当に駐車する有様でした。当時を知る人は今の環境に驚いています。

年間約千五百人の子供たちが訪れ、動物と環境に親しんで行き、また、年に何組かの同窓会の帰りに立ち寄り、それぞれの思いを巡らせながら

ます。

四十周年、五十周年記念、農專碑の移設など、農場に

同窓会から支援を戴いて来ました。合宿し作業に汗した農場実習が、やがて懐かしくなる年齢になつたときに、気軽に訪れる事ができるような場所として今後も維持される事を卒業生と共に願うところで

す。

私の新潟大学農学部での最大の出来事は、農業生産科学科の中に設置された『地域総合農学コース』の発足から関与できた事です。特にすばらしい学生諸君が専攻してくれ、一期生を世に送り、二期生の旅立ちとともに定年を迎えることができた事は、私にとって何ものにも替えがたい感動ものです。

私もなく平成生まれの学生が入学してくることに、月日の早さを実感するとともに、確実に大きくなつていく同窓会が益々発展する事を願っております。魅力ある農学部に発展するには同窓会のご支援が絶対に必要であります。

皆様方のご健闘を祈念しながら、お世話をなつたことに深く感謝申しあげます。



新大農場での二十年

伊藤道秋（ライルド科学教育センター）

て全員行(二)化の成果を得

ました。また、週休二日制導

入が、宿泊直問題を抱えるど

の大学農場でも大きな難題と

なりました。新潟大学では話

し合いを尽くして難問を克服

したことは誇れます。着任当

時の村松農場は序舎の周りで

すらカヤと雜草で覆われ、草

叢の中に適当に駐車する有様

でした。当時を知る人は今の

環境に驚いています。

年間約千五百人の子供たちが

訪れ、動物と環境に親しんで

行き、また、年に何組かの同

窓会の帰りに立ち寄り、そ

れぞれの思いを巡らせながら

万感の思いを私にも伝えてく

れます。

四十周年、五十周年記念、農場に

とつて大きな節目の行事には

復旧状況（水稻の作付けができない水田面積の推移） (単位: ha)

管内水田面積(A)	11/12現在(B)	(B)/(A)	12/28現在(C)	(C)/(A)	17年5月末現在(D)	(D)/(A)
19,751	10,761	0.54	4,715	0.24	778	0.04

緊急課題となつた今春の水稻作付け面積の確保について、確保は、降雪前に6,046haが復旧し、作付け不能面積を24%にあたる4,715haまで減少させることができた。

(3) 復旧状況

このようないわゆる被災農家、関係機関にとつて大きな励みとなり、その後の本格復旧の原動力となつた。

また、被災市町村職員は避難住民・ライフライン対応に追われ、農業関係には手が回らない状況であつたため、11月2日から県内外より延べ8,000名を超える技術職員の応援を得て、被害状況調査や査定設計書作成等に従事していた。だき、翌年1月21日に災害査定を全て終了するこ

小千谷市大字三仏生の復旧状況



収穫の喜び 9月27日



表土の埋戻しは5月末まで続いた

平野部の復旧はほぼ終了し、今後は山間地域の本格復旧が課題である。行政としては、平成17年災害（余震・融雪）も含め、次の課題解決に向け「農業経営再

(4) 今後の対応と課題
改良区等関係者の懸命な努力により、5月末現在の作付け面積を77.8ha(4%)まで大幅に減少させ、あわせて市町村間の作付け面積の調整により今春の田植えも無事終了し、被災農家は喜びの収穫を迎えることができた。

中越地震で生徒は

縣立長岡農業高等學校校長

山古志分校は復旧することなくその生涯を閉じる。地震

からの完全な復興はこれからであり、一番大事な時を迎え

長本間修(昭45)

養鯉池の災害調査にたずさわつて

(株)オリス 石田 隆滋(平8生理)

① 「越後杉で家づくり促進事業」や「農地災害関連区するなどにより、被災地域に密着して住民二一ツに沿つた被災地の創造的復旧・段階的復興を一日も早く実現できるよう支援していく方針である。

（2）「西整備事業」等関連事業導入による生活重建も視野に入れた中山間地域の創造的復旧。
② 营農・經營体制と土地利用の再構築等による中山間地域の農林業の継続と農山村の段階的復興。

「余震の中の決断」ありがとう文化祭」、「中止の文化祭復活へ、生徒が取り組んだ大きな出来事の一つである。市内の高校は全て中止の中、長農祭をやりたい、精神的ショックも、恐怖心もある。だからこそ前に進みたい。思い切って生徒、職員とともに実行した。迫り来る余震と時間との闘いであった。だが、生徒は踏ん張つた。地域、避難されている方を含め、好評の内に終わったのみならず、生徒に自信を与え、大きく気持ちが前進んだ。勇気と無謀は紙一重であるが、やつてよかつた。生徒の力は信じるべきだ。

とある女生徒は自身も被災している中で、ボランティアに励んだ。反面各地の高校生から抜けさせられた。高校生の持つていて底力を感じる瞬間である。今も生徒の思いは続いている。「旧山古志住民に押し花カード」、「新潟中越地震から一年、勇気と感動、音のエール」等々。

地震から癒えるのはずっと後になる。多くの人達から明かりを灯してもらつたが、生徒も明かりを灯し続けていた。地震で失つたものも大きいが、人の心を始め大きなものを得た。

一正蒲鉾株式会社

白井由美(平15応生)

一正蒲鉾株式会社は昭和40年に創設されて以来、練り製品の製造を行つてきました。魚肉の長所を生かし、ヘルシーかつ消費者の皆様に受け入れられる製品を模索しながら新商品の開発を行つております。また安全・安心・健康・環境をテーマに品質を重視したものづくりも心がけています。様々な商品力でゴリーの中でも「かに風味かまぼこ」は昭和54年に一正の火付け役となり、今やサラダの彩りとして欠かせないほどの位置付けとされるようになりました。また魚肉練り製品としてベーシックな蒲鉾を始め、おでんや煮物などで使用される揚げ物や竹輪、さらにその食材を使用したレトルトおでん、卵豆腐・ごま豆腐などの涼味商品、小腹が空いたときでも健康を意識し手軽に栄養をとれる魚肉使用のスナックまで商品群を広げてき

ました。現在では練り製品部門に留まらず、まいたけ生産事業もすすめ、新たな分野も開拓しています。

(製品)

おおまかな製造工程は、まず金属探知機に冷凍すり身を通して金属が混入していないかを確認し、なしということがわかった時点で解凍します。それをサイレンントカッターで塩・澱粉・調味料などを混ぜ合わせます。この工程を擂潰といい、魚肉特有の粘りを十分に引き出して食感を向上させる工程です。十分に粘りが出たすり身は機械で形作られ、加熱されます。それを冷却して包装、出荷となります。

主要力でゴリーごとで商品例をとり加工していく過程をお話します。揚げ物出荷量の大部分を占めるさつま揚げは、適度に解

凍された冷凍すり身を水・塩・調味料を加えてよく混ぜ合わせます。これを機械で形作り、油で揚げるというシンプルな製法です。他の揚げ物に関する大体の過程は一緒ですが、身配合・調味料・具材・油の温度条件を変えるなどしてレバートリーを広げています。

サラダでお馴染みのかに風味蒲鉾は、調味料などを加えてよく練られたすり身をシート状に押し出し繊維状に裁断、それを集束させてから製品一本の長さに切ります。しつとり食感に仕上げるため、加熱方法は蒸しで行います。当社のかに風味蒲鉾の「オホーツク」や「ヒュアふぶき」で使用している色素はトマト色素とパブリカ色素であり、自然な色合いと健康性をコンセプトとしています。

竹輪は練つたすり身を専用の棒に巻きつけ、食感を向上させるために一定時間恒温状況におきます。これは坐りという工程で、魚肉中の蛋白質の結合を促します。それから最終加熱の焼きを行い、香ばしい風味を付与します。それから簡便性を大きな売りとしているレトルトおでんは、いくつもの具材が入っているので

の商品にも共通して言えるのは品質を一定に保つた

当社の新潟大学農学部出身者

従業員総数791名のうち新潟大学農学部の出身者は15名おり、会社の経営層や商品開発部門に携わっています。

練り製品が食卓から遠いいる昨今、幅広い年齢層に受け入れられる商品をおいしさの面と安全面から追求し、一正蒲鉾の商品が皆様に親しまれるよう努力していることをう。またISO取得に関しては、も同様であり組織にも重きを



第十一回農学部フォーラムの開催

「災害復興一年の動きと展望—農学部の取り組み—」

第十一回農学部フォーラム実行委員長

荒 谷 明 日 兒



農学部では平成十七年十一月十二日、農学部一九八講義室において「災害復興一年の動きと展望—農学部の取り組みー」をテーマに、第十一回農学部フォーラムを開催しました。今回のフォーラムは、昨年の水害や中越地震といった災害の被害調査や学生ボランティアといった農学部の取

り組みを紹介するとともに、関係者および市民の方々からのご意見をいただき、今後、農学部として何が出来るのかを考えてみたいとの意図で企画されたものです。

鈴木敦士農学部長の開会挨拶に続いて、長島旧山古志村長（現衆議院議員）の右腕として活躍された長岡市復興推進室次長の青木勝氏（旧山古志村建設課長）による「大学の災害復興支援を考える」と題した基調講演。阿部信行教授、福山利範教授による「衛星画像情報で災害の被害はどこまでわかるか」の講演が行われました。基調講演では、中山間地災害での生活復興には、住宅建設が大きな役割を占める都市型災害とは異なり、中山間地農業の復興、すなわち農地・林地・養鯉池な

どを含めた復興の必要性が示されました。また農学部に対しては平場の農業とは違う、生活・暮らしの場としての農林・水産を含めた農業のあり方を検討してもらいたいとの要望が出されました。

次いで「被災地における災害復興の取り組み」と題して、水害で大被害を受けた長岡市桂町の加藤尚登氏、震源地であつた川口町武道窪の阿部恒雄氏、農学部と地域交流協定を締結している小国町の小島康市氏から被害状況と復興へ向けた問題点をお話いただきました。行政・大学の立場から

のコメントを玉井英一長岡地域振興局農地災害復旧課長、伊藤忠雄副学長、三沢真一教授、樺田豊助教授からいただき、参考になりました。伊藤亮司助教授、樺田豊助教授から、「災害の受け止め方を押聴で手から、昨年の夏季休暇に行われた水害被災農地、今年5~6月に行われた地震被災農地に対するボランティアについて、「農学部における災害支援ボランティア活動」と題

すばらしい可能性を感じました」（主婦）、「来年受験する子供の志望が農学部ということもあり、興味深く聞きました」（主婦）、「いろいろな立場での災害の受け止め方を押聴でうカテゴリーにとどまらず、『農』の本質を見直すよい機会になった」、「あらためて災害と復興を考える機会となつた。特に実際に被災され、災害そのものを体験され、現在も体験されている方、復興の第一線に立たれている方の話しさを聞けたことはとても興味深かつた」などの意見が寄せられ、教育面でも有意義であったと考えています。



ベジレー 同窓生からのたより

仲間達は今



丹羽國夫（昭28農）

学部第一回生の六回目の同期会がありました。学生時代の仲間のよさは、例え激論になろうとも「何でも云い合えること」に尽きます。その歎談の中では出席十七名の「老いて輝く」姿に接しました。例えば樋口春三君の「植物の姿勢と鮮度」という文章が東京都立田区の中学校国語教科書に載っていること。木村敬助君の労作「チューリップ・鬱金香」に中東から照会が来ていることなどです。

2 趣味

昭和三十九年（一九六四）の新潟国体を契機に始めたジヨギング。加齢と共に距離が短くなり速度も青年のウォーキング並みとなりましたが、キャリアだけは四十一年です。

3 最近心をうたれたこと

何年か前、農学部を訪ねた時、たまたま入口近くに集っていた学生達に或る研究室の所在を尋ねたところ誰一人知らなかつたことに愕然とすることがあります。こんなことは私が在学していた河渡時代にはあり得ないこと。同学集会があり得ないことが、このコミュニティが機能していない殺伐なものを感じました。狭い自分の専門領域だけに閉じこもることなく学部全体に目を向け四年間の共通体験を積んで欲しいものです。

1 近況報告

自治会・交通安全協会とか、子どもを事件・事故から守る「セーフティースタッフ」等、地域ボランティアに精を出しています。

私の個人的なことでは、去る九月三十日、退職以来十五年ぶりにB.S.N.に招かれマイクの前に立つたことです。今年が「新潟大火」満五十年ということで、私の孫の世代の男女アナウンサーにインタビューされ昭和三十年（一九五五）を語りながら、若い彼等に五十年前の私をダブルさせていました。そして彼等がこの日本の日本を背負つて行くんだななどと思い、聊か胸が熱くなりました。

4 大学・学生諸君へ

近況

新潟県保健環境科学研究所
森山 登（昭45農化）



登（昭45農化）

私の希望としては昭和三十六年（農九回）卒、小島誠氏。氏とは「松涛」第五号から第八号迄、三沢眞一氏と共に編集委員を務め、随分とお世話をなつたし、苦労をおかけしました。三十五周年記念事業については、今思ひ出してもしぼつた「知恵」、流した「汗」が貴重だった。

5 次回執筆者

農芸化学専攻者は2名と寂しい状況ですが、これは、県の環境関係職員の採用が最近、途絶えていることと関係しているかもしれません。

最近の当所のトピックスのうち、農芸化学的な話題ではスギヒラタケによる急性脳症

低下のある喫食者5名が急性脳症により死亡。秋田、山形等で死者がで、厚生労働省ではスギヒラタケを伝統的に食用として利用しておられ、それが突然、急性脳症と関係しているとされて、とまどいを覚えたものです。当所による患者血液等の微生物学的検討などから、原因がウイルス等の微生物に起因するという考え方には今のところ否定的で、天然物化学的な検討が大学、国機関等で全国的に展開されていますが、未だ原因は不明なままです。機能的な問題もあって、現在、当所はスギヒラタケを国機関に送りました。一日でも早く原因解明に至るよう祈るばかりです。

また、新潟県でも行財政改革の一環として、試験研究機関の地方独立行政法人化推進が唱えられており、外部の学識経験者等から構成される地方独立行政法人検討委員会で導入の検討を行っています。早晚、委員会から意見答申があると思われますが、どう展開するのか今のところ不明で

す。以上、簡単に、地方の公的研究機関の一端を紹介させていただき、近況としましたが、現状をイメージしていただければ幸いです。

次回執筆者として新潟県森林研究所の武田宏さんを紹介したいと思います。

.....

お久しぶりです

阿部米美(昭63林)



つなぐということが、卒業以来、抱きつづけた自分の夢であつたように思います。

この会は一般の方を森に招くイベントの開催や、互いに技能の研鑽をしたり、この資格の受験希望者の支援等を行っています。

会の立ちあげの頃に、メンバーとなつてはいますが、十年の活動報告を聴き、今後の展望を語る会場にいて、自身の十年を振り返つてみると、反省ばかり先にたちました。

森の近くに暮らしながら、家庭と職場の往復に日々が過ぎています。

山菜採りやきのこ採り、その調理や保存の技、木の道具を作る技など、身近に達人が沢山いるのに、私は眺めるばかりで足元にも及ばない、名ばかりのインストラクター。

進歩のない自分に歯がゆさを感じる私に、会の先輩方が、こう助言してくださいました。

ちょうど十年という区切りが一致したのですが、一昨年十一月に山形県森林インストラクター協議会の設立十周年を祝う記念事業、「森と人をつなぐ集い」が行われました。

「長い人生の中で役割といふものがある」と。
考えてみれば、悲観するこ

とばかりではありません。森は遠くに眺めているだけでし

このタイトルの、森と人をつなぐということが、卒業以来、抱きつづけた自分の夢であつたように思います。

たが、子供の成長はまじかで見ていられたのです。

私は今、「あられ」や「おか子供達が、この山里の暮らしの中から自然に対する意識をつかんでいくのはとても面白いです。虫を追い、花を愛で、風の冷たさ、陽だまりの温かさに感動し、疑問を抱く彼らと共に十年で森の入口まで来られる時期になつてきました。

先輩の助言通り、お婆ちゃんになる頃を目標にゆつたり構えて歩んでいこうと今は思っています。

次は、同期の飯山一男さんにお願いできれば……。

たより

阿部幸製菓企画開発部
今井朋子(平16農生)



みなさまお久しぶりです。

新潟市から離れること、約六十キロ、飯豊連峰と朝日連峰に囲まれた山形県小国町に暮らしております。現在四十歳、まだ手のかかる二人の子供の母。山形に来て十年が経ちました。

ちょうど十年という区切りが一致したのですが、一昨年十一月に山形県森林インストラクター協議会の設立十周年を祝う記念事業、「森と人をつなぐ集い」が行われました。

「長い人生の中で役割といふものがある」と。
考えてみれば、悲観するこ

とばかりではありません。森は遠くに眺めているだけでし

社に入社したてのころ、実際にされた質問です。

私は今、「あられ」や「おか

き」の商品開発の仕事をしてます。たとえば、「〇〇味の米菓が

あります。たとえば、「美味しくないだろう」と躊躇しないで試作してみる。と言うように、ただ過ごしているだけです。調べものは、大体電子辞書を利用しています。学生時代に購入し、主に英和辞典として使つていましたが、今では専ら広辞苑として使用しています。常に鞄に入れて持ち歩き、以前では「わからない」で終わって

いた私ですが、すっかり調べ

うことができました。

しかし、焦つてばかりもいられないでの、今はプロの仲間入りをするべく、試行錯誤中なのです。

こんな私が最近心掛けたい

と思っているのは、少しでも楽しそうだと、これは何だろ、どういうことだろう、

と興味や疑問を持つたなら、とりあえず試しにやってみたり調べたりするということです。

とは言え、大層なことをしているわけではありません。例えれば、時間やお金をやりくりして旅行をする。つまり

さて、冒頭の質問の答えですが……もしもわからなくな

て、知りたいと思つた方がいい

たら、ぜひ調べてみてください。

次は、渋川恵理さん、お願



◇学部だより◇

グローバル農学部をめざしてⅠ

農学部国際交流委員会委員長 楠原征治

国際交流協定校とのシンポジウム

東アジアの食料生産と環境保全を考える

農学部は同窓会の多大なご援助により、学術交流協定を締結しているインドネシアのボゴール農科大学、中国の東北農業大学、モンゴルの国立農業大学、韓国の嶺南大学学校自然資源大学およびタイのチエンマイ大学の5大学から19名の代表者および研究者を

招聘し、平成17年9月13日から15日までの3日間、「東アジアの食料生産と環境保全の問題を考えること」を目的とした第1回国際シンポジウムを開催しました。

13日のオープニングセレモ

ニーと協定校の大学紹介は、嶺南大学校自然資源大学学長、ボゴール農科大学副学長、モンゴル国立農業大学副総長、ボゴール農科大学副学長、チエンマイ大学農学部長より、各大学の概要について紹介をいただきました。シンポジウムは、14日前に伊東睦泰教授の座長による「東アジアの草地畜産の現状と展望」、午後に新美芳二教授の座長による「東アジアの伝統的園芸と作物」、15日前に門脇基二教授の座長による「東アジアの食品・その味、機能性、安全性」、午後に阿部信行教授の座長による「熱帯における資源と環境への展望」の課題を設け、協定校の各大学からこれらの課題についての現状や取り組みなど話題提供をいただき、活発な議論が行なわれました。シンポジウムは開催期間中、国内の大学教員、

鈴木教士農学部長の開会挨拶に始まり、引き続き阿波村に「新潟大学の国際交流について」のお話をいたしました。この後、新潟大学農学部長、東北農業大学事務室主任、

新潟県職員、学生、留学生など合わせて300名余が参加し、また農学部の研究を紹介するポスター1セッションも行

われ、農学部から40題のポス

ターを展示することができます。

農学部から40題のポス

農学部の動向

平成16年11月以降の農学部の動向は次の通りです。

退職

長年、当農学部のため、また同窓会のために多大なご貢献をなされた方が平成18年3月に退職されます。

・農業生産科学科
教授 伊東陸泰 先生
・応用生物化学科
教授 尾和尚人 先生
・生産環境科学科
教授 山本仁志 先生
・フィールド科学教育研究センター
教授 伊藤道秋 先生
客員教授 成保俊一 先生
・応用生物化学科
助教授 二階堂直樹 先生
(平成17年5月)

河田 弘 元林学科造林学
教室教授が平成17年10月10日に逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいた
します。

会員通信

次の会員の方々が学位を取
得されました。

黒沢 亨 (昭56畜産)
博士 (農学) (新潟大学)

本間新哉 (昭56農工)
博士 (農学) (京都大学)

柴田昌宏 (平4畜)
博士 (農学) (新潟大学)

塙田泰博 (平10生環)
博士 (農学) (京都大学)

浅妻 悟 (平11応生)
博士 (農学) (新潟大学)

山本州平 (平11応生)
博士 (学術) (新潟大学)

新井伸昌 (平11生環)
博士 (農学) (新潟大学)

斎藤 順 (平12農生)
博士 (学術) (新潟大学)

お祝い申し上げます。

教員訃報

今年度の国際交流の主な取組として、4月の中国東北農業大学学長の来訪、9月の国際シンポジウム(別記)、11月の留学生との懇談会などがあります。

農学部が国際交流協定を締結している中国の東北農業大学から李学長が平成17年4月10日から12日まで農学部を訪問され、「東北農業大学の国際交流について」のご講演を行ったきました。東北農業大学とは最も親密な交流を行なつてきており、これまで東北農業大学から多くの留学生が学び、現在も大学院や研究生が農学部で勉学に励んでいます。また、東北農業大学とは学生交流も結び、単位互換による学生も在学しています。

一方、農学部からもかなりの教職員や学生が東北農業大学を訪問していますし、今年も2名の学生が訪問して交流を深めています。このような折、李学長が農学部を訪問していることが期待されます。

恒例の農学部留学生と指導教員との懇談会が11月14日に開催されました。農学部の教員が指導する留学生は11月1日現在、15名(中国7、インドネシア2、バングラデッシュ2、ペルシャ2、チリ1、ネパール2、イラン1)です。懇親会には留学生とその家族、ならびに関係教職員が多数参加して親睦を深めました。この懇親会は誰もが楽しめる国際交流の場として、また異文化間におけるコミュニケーションの架け橋として役立つ

このような国際化の対応としての取組は、年々盛んになっています。この国際化協定校とのネットワークの構築につながり、農学部の国際化を促進することになると思つております。

国際交流

だより



◇ 学部だより ◇

グローカル農学部をめざして2

特別シンポジウム

「食からの復興—災害からの教訓に学ぶ」を開催

平成17年10月29日 地域連携フードサイエンス・センター主催



食品関連産業が充実した新潟が、団らんも中越大地震を経験した。その中で、未だに「災害時の食料」が確立されていないことが浮き彫りとなつてきた。そこで震災から1年を期に、「食からの復興—災害からの教訓に学ぶ」を開催した。約100名の参加者がおり、未だ震災の記憶が新しい

ことがうかがえた。長谷川学長、鈴木センターランの挨拶に続き、課題の認識と解決のため、各方面で災害食に関する方々から、以下の二講演を頂いた。

阪神大震災

被災者の視点から

甲南女子大学 奥田和子教授
「日本の国際緊急援助隊における食糧について」

国際緊急援助隊 大田孝治氏
「避難所での口腔ケアと食について」

長岡歯科医師会 澤秀一郎会長

「被災生活における食の問題—中越地震「生活アンケート」から」

人文学部 松井克浩助教授
「非常食の現状と課題（食品加工と被災者の視点から）」

ホリカフーズ（株）別府 茂氏



今回の松井は、平成16年10月23日の中越大地震から、1年以上を経過し、復興への取組も進む一方で、いま、多くの方々が仮設住宅に住まわれるなど、復興への過程であること、新潟大学内に「復興科学センター」が設置され、地域貢献のための調査研究が進められようとしていること等から、中越大地震に関わっている同窓生からの寄稿や復興をテーマとした農学部フォーラムの内容を掲載しております。

同窓会事務局も長年御尽力を頂いた小林圭次さんに

変わって、農学部の職員としてもお世話になつた岡部さんにお引き受けを頂いたと聞いております。

松井がマンネリ化しないよう努めたいと考えております。記憶を風化させず、何らかの形で関わり続けることが、新潟大学で

編集後記

と感じております。

また、今回から同窓生の便りをベンリレーのスタイルとしてみました。できれば、年齢や学科が偏らないように多くの方々からお便りを寄せていただければ幸いです。



このシンポジウムを基に、「食からの復興」からの非常食、災害食に求められるもの（仮題）を光琳出版（東京）より5月に出版予定である。

編集委員として、今後も

被災地は、昨年12月から予想外の大雪に見舞われております。記憶を風化させず、何らかの形で関わり続けることが、新潟大学で学んだものとして必要なことを